

二〇二〇年一月一日

国産みの齋庭に凍てしきざれ石
松影の揺るる蹲ひ淑気満つ
大楠の枝の高きに初鴉
年少の順が習ひと屠蘇を注ぐ
初日の出西の月にも手を合わせ
定年を迎える年の初日かな
初空の茜に向かふ一番機

二〇二〇年二月三日

まどかなる月を仰ぎて年惜しむ
最終の飛機の尾灯や大晦日
キツチンの虜になりて年用意
生かされて初曾孫へとお年玉

二〇二〇年二月三〇日

藁匂ふ大注連縄や鷲の門
年の瀬やウーバーイーツ駆ける音
字たらずのような一日冬籠
寒柝の裏拍取りて犬吠えぬ
寒柝の遠ざかるまで窓を開け
寒の月磨き上げたる玻璃窓に

二〇二〇年二月二九日

忠魂碑裏は山茶花落ちどころ
看板は右書き屋号注連飾る
皺の手をかざしあひたる囲炉裏かな

二〇二〇年二月二八日

母逝きてころもとなき年用意
煤逃げの家苞に買ふ御座候
野良猫の呼べば媚び寄る冬日向
数へ日や抜き差しならぬ齒科通ひ

二〇二〇年二月二七日

炬燵から聞こゆお手玉数へ唄
万両や写経する座に加はりぬ
マスクして世事みな遠くなりけり
弁当の届く夜勤や子のサンタ

二〇二〇年二月二六日

童らの地団駄攻めや初氷
凍み豆腐旨く炊けたとお供えす
暁光の一筋走る雪野かな
年暮るるクレールは全て首を折り
スケーター夜叉ともなりて舞ひにけり
ゆくりなく明智の里の帰り花
寒月を揚ぐ橋立の砂嘴の松

毎日句会みのる選・二〇二〇年一月三日

たか子 菜々 素秀 せいじ 明日香 豊実 凡士 菜々 凡士 満天 宏虎 素秀 もとこ 邑 むべ 豊実 せいじ たか子 凡士 潤道

もとこ 凡士 やよい うつぎ 素秀 みづき みづき 智恵子 音吉 隆松 たか子 もとこ うつぎ 凡士